

“環境変化が厳しい時代からこそ、
研究と現場の距離を縮めたい”

第53回北洋研究シンポジウム

『噴火湾の海洋環境と漁業資源の変動』



3月7日、北海道大学水産学部水産科学未来人材育成館で、第53回北洋研究シンポジウム「近年の噴火湾における海洋環境と漁業資源の変動」（主催＝（一社）水産海洋学会、後援＝（公財）北水協会）が開催された。当日は、道内外の研究者や企業関係者、学生、噴火湾の漁業者、漁協・市町の職員ら60名を超える参加があった。



▲木村会長が開会挨拶

シンポジウム開催にあたり、水産海洋学会会長の木村伸吾東京大学教授は、「このシンポジウムは、タイトルの回数が増えるように今回で53回を数えるもつとも歴史があるものだ。これまで、大学だけでなく、水産試験場などの研究機関や漁業者との三位一体で活動が進められてきた。近年、変動する地球環境の影響が水産業にもあらわれているが、『持続可能な噴火湾』を指し、今後も効率的な操業のために、将来の予測とともに環境面からの提案をしていきたい」とあいさつした。これに続き、北海道大学高津哲也教授から、「2023年の秋季

に湾内の表層水温は過去最高を記録し、広範囲に貧酸素水塊が発生した。このシンポジウムでは、貧酸素水塊の成因を検討するとともに、噴火湾の漁業資源やホタテ養殖業などを踏まえ、噴火湾の将来について議論をしたい」と開催趣旨の説明があった。

噴火湾では、春季に親潮系水が、秋季には津軽暖流水がそれぞれ流入し湾内の海水が交換されるが、数年に一度、貧酸素水塊が生じることが、これまでの調査研究で明らかになっている。今回のシンポジウムでは、北海道大学の阿部泰人准教授が、いままでは難しかった貧酸素水塊発生を予測する手法について発表した。また、道総研函館水試の鈴木祐太郎主任主査からは、海洋観測の結果、近年は親潮系水の流入が不足し、夏季には高気温による海面表層の超高水温化、さらに津軽暖流水の流入阻害など、噴火湾の環境が過去に記録されているものとは大きく異なっていることが報告された。このほか、噴火湾における冬季の栄養塩動態が北海道大

学大学院の崔天暢さんから、2023年秋の貧酸素水塊の影響について高津教授から発表があった。また、漁業資源については、スケトウダラやアカガレイなどの底魚資源を道総研函館水試の武藤卓志主任主査から、トヤマエビ、ケガニなどの甲殻類について、道総研栽培水試の渡野雅道研究主幹から発表があった。最後に、道総研函館水試の夏池真史主査からは、ホタテ養殖と海洋環境についての報告があり、近年の夏季における高水温は、稚貝の成長不良やホタテ資源の再生産そのものにも影響を及ぼしているとの報告があった。さらに、夏池主査は、このように環境変化が著しい時代だからこそ、研究

と現場の距離を近くする必要があると述べた。

総合討論では、噴火湾の環境変化による影響が、漁業としてやれる限界に近づいていることから、これからもモニタリングを重ね、データを取り、知恵を出して協力していくことの重要性について確認された。他方で大学や水産試験場などの研究機関は、調査におけるマンパワーが不足していることから、今後、漁業者にデータ収集などの協力をお願いしたい旨の発言もあった。



▲北大高津教授が趣旨説明

シンポジウムの対象となる噴火湾では、北海道大学によって、道総研水産試験場や水産技術普及指導所との連携のもと、1970年代から海洋環境や漁業資源の調査・研究が進められている。

また、シンポジウムを後援する（公財）北水協会は、平成3年から現在まで34年にわたり、これら噴火湾での北海道大学の研究を支援しており、その成果は協会のHPにも掲載されている。

（文責 公益財団法人北水協会 監事 中村慎一）